



2012. 11. 30

創業50周年記念、思い出をたどる(2)

▽店内の雰囲気は昔と変わらずー

英国のパブ風の「ピノッキオ」内部は、開業時からほとんど変わっていない。奥の丸テーブルの天井から下がったベルの形は、店が紹介された写真には必ず写り込んでいて特徴を表しているが、これはもともと排気口の役割を果たしていた。かつて、丸テーブルの真ん中にはコンロがあり、シチュー鍋が提げられていて、目の前でサービスされていた。

いまは入り口横に置かれた自動演奏ピアノは、昔は奥に置かれていた。ドイツ「WURLITZER」社製で、いわば五線譜の役割をする風を通す穴の開いたロールが十数本置かれていたが、いま残っているのは数本のみ。しかも本体が故障していて、残念ながら聞くことはできない。

いまもボンゴが2つ残されているなど、ライブ演奏が行われていた時代もあり、その模様は地元のタウン誌などに紹介されている。

▽向井修二コンサートー1968年(昭和43年)10月

画家向井修二がギター片手に新作「ドーナッテンノカナ」を披露。超満員の店内の様子がうかがえる。店の造りなどは、現在とほとんど変わらず。

▽チリの船員による弾き語りー1970年(昭和45年)3月

ダゴベルトさんが6ヶ月間の休暇を神戸で過ごす。ビールを2・3杯おごると、「ヴァリア・コンディオス」「ラ・バンバ」などラテン・ボーカルを歌う。アメリカから日本への航海で出会った日本人女性マリコさんとの恋の思い出を歌った「マリコ・ソング」が人気。「まもなく、日本の女性と結婚します」と、3月はじめには乗船する。

また、ピアノの弾き唄いのうまいフィリピン人のアーニーが人気者。彼は万博のフィリピン館でもエレクトーンを弾き、夜にはピノッキオに姿を見せて客のリクエストに応じていたという。

▽ボサノバ学生バンド人気上昇ー1971年(昭和46年)秋

土・日の夜だけ学生カルテット(フルート、ピアノ、ドラム、ベース)のボサノバなどソフトな演奏が入った。彼ら目当ての外国人客や、ジャズファンが増えていて、フルートのT君には若い女性ファンも多いとか・・・

▽大阪万博を機に、大阪へ進出ー1970年(昭和45年)5月14日

当時のオーナーMさんが、「ピノッキオ大阪」を北区兎我野町21 松本ビル地下1階に開店。大阪店へは中山手店にいたコックのNさんが移り、Mオーナー

の奥さんが取り仕切っていた。大融寺の南西角の対面にあり、この年開催された大阪万博(6000万人入場)での外国人客を見込んだもの。ここは曾根崎警察署から東へ、扇町公園への途中の歓楽街の真ん中で、近くには関西テレビ(当時)もあり、新聞・放送などメディア関係のお客も多かったようだ。住宅地図1971、76、77、78年版には「ピッツアハウス ピノッキオ大阪」とあるが、80年11月版では「ピザ味良乃亭」に代わった。従って約9年間の営業だった。

(写真:ピノッキオ大阪のビル)



この大阪閉店時、店内に掲示されていた金属製のエンブレムが、神戸と大阪店の常連で、朝日放送のアナウンサーだった長沢彰彦さん(篠山市在住)に譲られ、いまも青春時代の思い出の記念として、ご自宅の書庫に長らく保存されているとの話も

たらされた。このたび、30数年を経て「神戸・ピノッキオ」へ「里帰り」することになった。長沢さんは、週に数日は通ったというほどだからこそ、譲り受けることができたであろうことは想像できる。



(写真:篠山に保存されていたエンブレム)

この頃の「ピノッキオ」は、狭い店内にもかかわらずピアノやギターのライブハウスの雰囲気だったことはすでに紹介した。大阪店も同様だったようだ。神戸店でピアノを弾いていたOさんが、その後ピアノバーを大阪・北新地に開き、いまもライブハウスとして営業中であることなどから想像すると、その後の「ピノッキオ」の雰囲気が一変することとなる。(続く)